

殿の別當なりける侍を召て、麥飯に鯛あはせにて、只今調進すべきよし仰られければ、則參らせたりけるに、孝道にくはせられけり、日暮し遊びこうじて、物之ほしかりける時にて、かひく敷皆くいてげり、其時いよくしかり給ひて、三千三百三十三度の拜をせよと仰られければ、孝道本よりすぐよか成者にて侍うへに、只今物よくくいて力も有て、顔こえけるまゝ、いとやすやすとしはてにけり、其時入道殿、かしらがきをせさせ給ひて、やすからぬものかな、法師はしなばやと仰られたりける、上臈しかりける御かん當なりかし、此飯菜をうとましき事に思召取たる事は、御遠行の時しろしめしたりけるとかや、さなくては、誠にいかでさる物あり共しろしめすべき、

〔酒食論〕飯室律師好飯申様

夏はすゞしくおぼえける、麥の御れうもめづらしや、

〔武將感狀記六〕一源君家康於參河每歲夏中ハ麥飯タリ、近侍ノ人潛ニ白米ノ飯ヲ椀ノ底ニ入レ、上ニ麥飯少許ヲ蓋テ出シケレバ、源君御覽アリテ、汝等予ガ心ヲ不曉、以予客ルト思ヘルカ、今戰國ノ時ニテ兵役動ヌ時ナシ、士卒煩擾ニシテ寢食ヲ安ゼズ、予獨何ゾ飽食ニ忍ンヤ、且我一身ノ奉養ヲ儉約ニシテ、以テ軍用ニ給セントス、百姓ヲ勞シテ自ラ豐ナル事ヲセジト仰ラレケレバ、聞ク者皆悅服セリ、

〔三省錄二〕大神君大濱の長田平左衛門宅、江御著船の節、御料理の次第、釣命のよし、今に永井家

に毎年元朝の式となる、麥飯に大根を交鹽いなだの汁、田作鱈、こんにやくの煮ものなり、右は永

井家のものがたり也、續兵家茶話

〔醒睡笑一〕客來に亭主出て、飯はあれども麥飯ぢやほどに、いやであらふずといふ、我は生

得麥飯がすきぢや、麥飯ならば三里も行くはふといふ、さらばとてふるまひけり、又有時件の